



こん せん

# 根釧原野の

# 釣り

竹森 義男

*Yoshio Takemori*

文芸社

# 『Boon-gate』のPDF作品を ご覧いただく前に…

## 操作について

- 作品の多くは「もくじ」のページで、進みたいページの項目を押せば、そのページまでジャンプし、また、ジャンプしたページのタイトルを押せば、目次のページに戻るよう設定しております。
- 直前に開いていたページに戻るには、画面上の「◀」ボタンで、直前に開いていたページに戻ります。

## 読み方いろいろ

- 通常は画面の「倍率」が100%前後になっていますが、「倍率」を150%まで高めると文字が読みやすい大きさになります。
- 通常は「見開きページ」で設定されていますが、「単一ページ」にすると読みやすく感じます。
- 読み進めるときは、「十字キー」を使用すると手軽です。
- 「サムネイル機能」を使用して読み進めると、2～3頁からとばし読みするのに便利です。
- 頁を「回転」させることが可能です。地図などを拡大して見るときに便利です。

[http://www.bungeisha.com/PDF\\_is/05-top1.html](http://www.bungeisha.com/PDF_is/05-top1.html) でPDF作品についての説明を致しております。ご参照ください。

根こん鋤せん原野の

釣つりり

竹森義男

*Yoshio Takemori*

釧路赤十字病院副院長

畏友 故三輪

映

君に捧げる

# 口絵省略

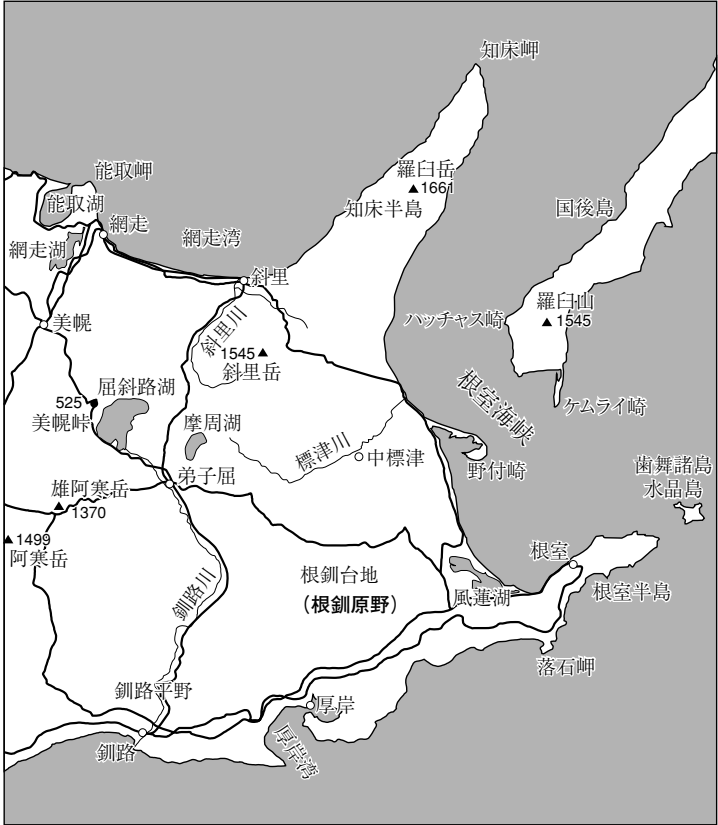
本編はダウンロード時間短縮のため省略版でお届けしています。  
途中省略なしの完全版をご希望の方は製品版をご「購読」ください。

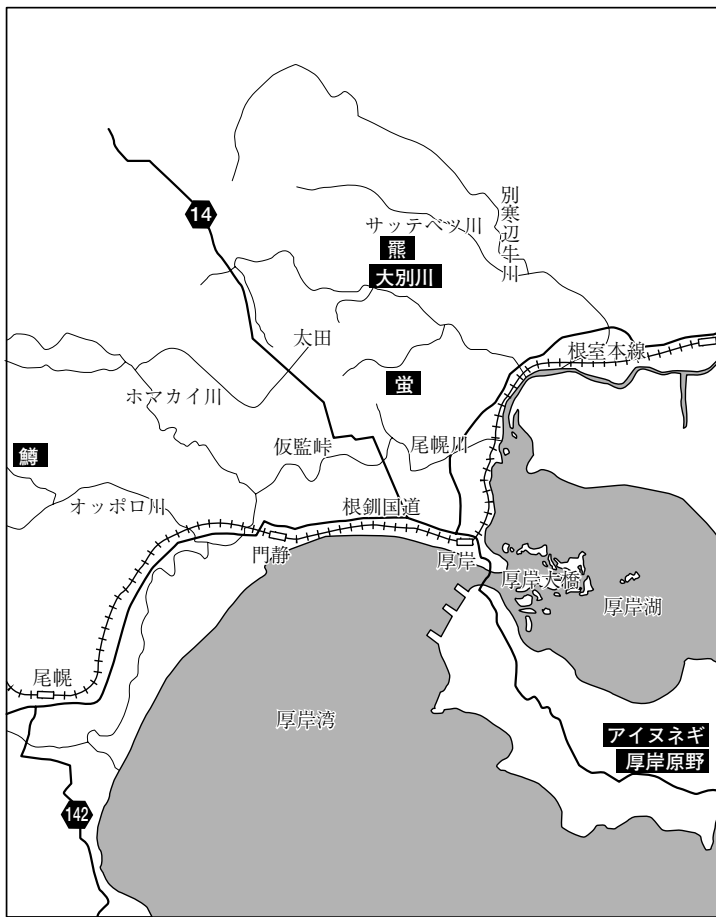


こんせん  
根釧原野の釣り※目次



あとがき										
	161	147	133	113	101	83	59	49	25	9
		標津山地	厚岸原野	アイヌネギ	オシヨロコマ	鱒	大別川	螢	西別川	麗

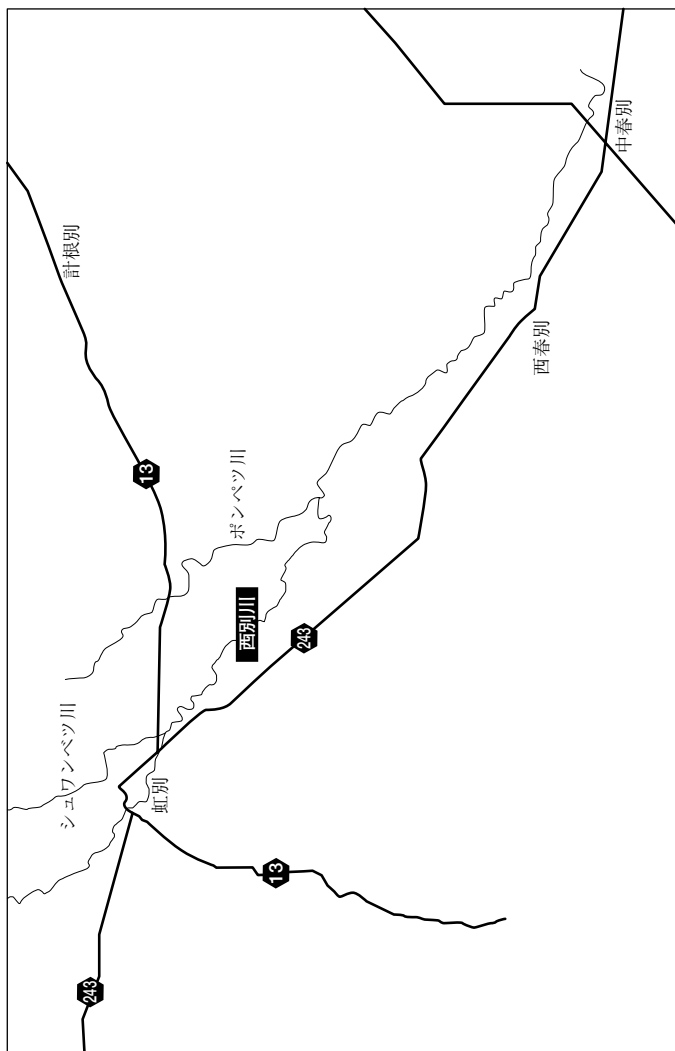




● 白抜き文字は題目の地



● 白抜き文字は題目の地



● 白抜き文字は題目の地



巽

道のかたわらに擬宝珠ぎぼしが薄紫の花柱を無数に並べ、タンポポの実の落下傘がゆつくりと飛びながら青空と牧草地に消えていく。

ぬるぬる滑る泥道を、

「せいの一。よいしょ。ひえー。うんうん」と喚わめきながら、車を道なりに走らせようと、ステアリングとアクセルに集中するが、ついに車は道から外れて横向きになり、前のバンパーは斜面の赤土にめり込み、後輪一つは宙に浮いてしまった。

「参ったな。奥から車は来ないと思うが、牛の通り道だし、このまま放つといても帰りには苦勞して引つ張り出さなきゃならん。おい、牧柵ほくさくの門が閉まっているぞ。放牧は済んだらしい。頼んでくるか？」

白樺とオンコ（イチイ）に囲まれた母屋の煙突から青白い煙が澄み切った空に溶



最奥の牧草地

け込んでいく。

こんな所でお気に入りのカミさんと老後を過ごせたらいいなと思わせる、のどかな佇まいだ。

「おはようございます」

土間の薄暗い上がり口に作業靴がないので、牧舎に回って見た。

銀白色の搾乳タンクのコックを開いて、搾りたての奴を牛乳缶に移している主あるじに、再び、

「おはようございます。実は、私たちの車が脱輪して、お宅の道を塞いでしまいました。ご迷惑をかけてしまうといけないので、二人

で何とかしようと頑張ったのですが、道が滑ってどうにもなりません。板か、藁が頂けると助かるのですが……」

友も帽子を取って、ピヨコリお辞儀をした。

「時々、川のそばに車があったのはあんたたちだったんかね。よくも、こんな入り組んだ所まで知っていると感心していたのさ。牛乳缶を道まで出したら手伝ってやるよ」

「じゃ、缶を出すのを手伝わせてください」

二人しておのおの缶二つをぶら下げて牛舎から出ようとしたら、重すぎてだめだ。一つずつ両手で抱えて二十個ばかりを運び出した。思いなしか、中の牛乳が濃くてタブタブしているようだ。

上のほうにはバターが出来ているらしい。

その間に、馬は飼ってないか、あたりを窺った。馬糞があれば、ミミズを分けてもらえそうだから、この先大助かりだ。

大汗かいて戻って来たら、土間の上がり台の上に置かれた井に牛乳がなみなみと

注がれていた。

「煮立ててあるから」

「うわ！ すげえ！ バターが三ミリも浮かんでいるぞ。こんなの飲むのは初めてだ」

「子供の頃飲みましたが、コップに付いたバターが美味しくてペロペロ舐めましたよ」

手拭いで汗を拭きながら、少しずつ啜る。牧草の香りと、牛の獣臭さが混じり合ってコクがある。

「ご馳走さまでした。初めて原乳を飲みました。いつも飲んでいるのとあまりの違いに驚きました」

「さて、リヤカーに板と藁を積んで行ってみるか」

納屋の裏手から黴臭いのを積んで、うまく脱出するとよいがと、不安を抱きながら懸命にリヤカーを押しした。

「よくまあ、こんなに横向きになったもんだ」

主はぐるりと見回して、

「これじゃ、トラクターがいるなあ。気い付けて後輪をジャッキアップして、板と藁をたっぷりかませておいてくれ。ジャッキは沈んじまうから、板を敷けよ」

泥だらけになる前に、胴長靴を履き、パンタグラフ型ジャッキで何度もしくじりながら、やっと十センチばかり車体を浮かせた。

丘のなたから力強いエンジン音が近づいてくる。

「ジャッキ外したか？ 有刺条線を片付けて、牧場に引っぱり揚げべえ。牽引ロープも二本掛けつか。ニュートラルで、エンジンはいらねえ。ハンドルをしっかりと握ってくれ。そっちの兄さんは、横から安全を見てくれ。止まれ！ は手を上げれ！」

ひとときわエンジン音が大きくなると、めり込んでいたバンパーがガクンと抜けて、板がベキッと折れ、スバルは尻からよたよた上りきった。

彼はロープを外しにかけ、俺は板と藁を片付けた。それと牧柵を。

「いがったねえ。これから釣りか？ うん。ところで、二日前からおらのベコ二頭が帰って来ねえ。クマにやられたんかと思つて、明日、別寒辺牛川あたりまで探してみようと相談してたのさ。あんたらも大事とつて南の川に行くほうがいいぞ」

「えっ。この先詰めると、別寒辺牛川に行けるのですか？ 地図の見方を間違えているのかな。おい、地図を出してくれ」

「この辺がお宅の牧場。道なしだが、村外れから三キロはある。川の向こうはパイロットフォレストだね。何だ？ 俺たちの釣る川は地図にも載っていないぞ」

「どれどれ。ここはもつと東だ。古い測量なので原野のままだ。あんたらのサツテベツ川はこれだ。悪いこと言わんから、戻んな。帰りは牧場突っ切つて反対の道に出るんだ。砂利道だ」

「はあ、そうさせてください。朝早くからすみませんでした」

「クマには氣い付けるんだぞ」

別寒辺牛川は前から一度は釣つてみたい川。それも、人の行きづらい中流に出られるのを知ると、クマは怖いが、行きたい気持ちを抑え切れない。

トラクターが丘に隠れて見えなくなると、顔を見合わせ、

「大丈夫。行こう！」

何が大丈夫なもんかだ……

まず、大別川おおべつを渉わたる。

炭焼きの廃道を辿ると、視界の悪いのが気になる。登り下りを避けるため丘の裾を丹念に巡る道も、使われなくなって三十年は経っているのだろう。道の両側には雑木が生い茂り、冬には風が吹き抜けるのか、カーブの裸地に、タケニグサが群生している。

谷地坊主やちぼうずも緑の髪を胸丈ほどに伸ばし、丘の縁のフキは大きな葉を重ねている。

夏の盛りにこの道を通ったら、晴れているのにサアッと雨音がして、何？ と立ち止まると、樹冠から小豆大のダニが無数に降ってきた。本当に茶色の驟雨しゅううだっ

た。慌てて駆け抜けて難を逃れたつもりでいたが、釣りをしているうちは夢中で感じなかったのに、帰り際には体中痒くなり、二人とも裸になり調べると、十匹くらいのダニが血を吸って真ん丸くなっていた。

メスとピンセットで丁寧に取りないと、ダニの頭が残り、しばらくひどい目に遭うからと、病院に戻るまで我慢したのを覚えている。

幸い、今はダニの季節ではない。

「なあ、こんなに見通しが利かないと気味が悪いね。どうだ、歩きにくいが、丘の尾根伝いに変えようか？」

「案外、笹ばかりで遠くまで見えるから、辛くても、安心ですな。そうしましょう」

丘の笹原は膝丈しかなく、所々に朽ちかけた大木の切り株があるだけだ。

緩やかな丘波の彼方、約二キロに鮮やかな緑のカラマツの森が見える。パイロツトフォレストだ。その中を別寒辺牛川が流れているはずだが、その姿は想像するしかない。

底の水草の割れ目に山女魚やまめやニジマスが見え隠れし、川を横切っている倒木しもの下の渦には、イトウやアメマスが潜んでいるだろう。竿の長さが足りないかな。

空はどこまでも澄み切っている。

コツコツコンコンと啄木鳥きつつきが餌を探している。

ここで一休みと、朽ちかけた切り株に腰を下ろし、ナップザックから温かくなつた「コーラ」を取り出し、煙草の火を借りる。

「空き缶棄てるなよ」

「？」

「クマ除けに使える」

一息して、また笹原をがさがさ歩き始めた。

笹のない所で陽の豊かな辺りには、エゾキスゲがびっしりと黄色い集団をなし、ハ

クサンチドリもこれが野生の花とは思えない優雅なたたずまいを見せている。

浅緑の群れはワラビだ。一所でカマス一杯は採れる。そんな群れが五、六カ所もある。これだけ奥だとワラビ採りも来ないから、茎も小指の太さはある。一月前から、駄賃に持ち帰るところだ。ただ、ワラビは折って束ねるとびっくりするほど発熱し、ビニール袋に入れたりすると蕩けてしまう。網袋が最もよい。

二人とも、油断なく、四方に気を配りつつ、笹を踏みつけて行く。

「おい。なんか、獣臭くないか？」

「はあ、そうですね。臭いせんが」

立ち止まり、道際の林を隈なく見渡す。

「フキ原が広く踏み倒されている！ あっ、その先のヨモギもだ！ クマが寝転んだ跡だ。やっぱり、本当だったんですね」

「さっきの缶を出せ。小石がないか？ ナイフで口を大きくするから、石を入れてガンガン音を出そうぜ」

小石が見つかり、缶を揺すった。カウベルの澄んだ音とは大違いだが、恥ずかしいくらいでかい音を出す。

クマの寝床に忍び寄ると、強烈な臭いだ。抜けた毛がフキの葉にこびりついていて、足跡を探すがよくわからない。

「道へ下りてみよう。足跡がはつきりするかも？」

「糞の硬さでは、昨日の跡らしい。反対の丘へ向かっていますが、油断は出来ませぬね。また、尾根に戻りましょう」

あと、一キロ強。進むか、退くか。

お互いの真意をはかりかねて、

「トスで決めるか。表なら、退却」

「オーケー」

七、八メートルも放り上げられた硬貨がキラキラ光りながら落ちてきた。

裏だった。

これからは、だらだらした下りのうえ、前方の別寒辺牛川が守ってくれるような気がして、再び、廃道に戻った。

背の高い彼は大股だから、俺は小走りになる。

早く歩く割によく見えているらしく、ちよつと立ち止まり、地面を指し、

「クマの足跡だ！ 新しい！」

急いで道の縁から上ると、二人とも息をのんだ。

道からわずか十メートル離れた窪地に、牛がずたずたに引き裂かれて、二十メートル四方に散らばっている。目につくのは、あばら骨。内部はがらんだ。赤いあばら肉はあちこち垂れ下がって、地面に黒い染みを作っている。頭は頬の部分がそぎ落とされ、白く濁った眼は空を睨んでいる。

それにしても、後足がない。埋めたのか。

へっぴり腰のまま隣りの窪地を覗き込んで見ると、新しく土が掘り返されて、一部盛り上がり、牛の蹄ひづめが見える。血の臭いと蠅の猛襲で、思わず少しずつ後ずさりしていた。

お互いの顔は真っ青だった。

背中合わせになり、横歩きで視界を確保し、プーマのナイフをしっかりと握り、気も狂わんばかりに缶を叩き続けた。

それにしても、なぜ鳶や鷲が、そして、狐がまわりにいないのか？ クマがまだ近くにいますか？

違う。

彼らは欲しい物は凶々しく横取りするはずだ。

そうか。あと一頭も殺<sup>や</sup>られているのか。それならばクマは満腹だろうから、不意に遭いさえしなければ、大丈夫だろう。

ようやく動悸も落ち着いてきた。歩みも常に戻った。

ひたすら歩いた。幾度も振り返った。

現場から遠くなると、さすがに缶の音もいい加減になって、とんでもないことを

考えている。

「大別川で釣ろうか？」

「ウフフ……」

まだ、昼前だ。

(一九六八年六月末)



西別川

土曜の夜の症例検討会も終わり、ほっとして昼間買ってきたドンガイ（イタドリ）虫を取り出そうと、二人がかりでイタドリの枯れ枝をナイフで裂きはじめた。

明日の釣行は西別川だ。  
ちようこう にしべつ

西春別あたりの本流に入るか。  
にししゅんべつ

支流のシユワンベツのダム下からいいな。

それとも虹別のポンベツ川との合流点か。  
にじべつ

ドンガイ虫を潰さぬように、黙々とナイフを使うが、節の近くにいるのを取り出すには枯れ枝を噛み砕くことになる。間違えてぐしゃつと虫を潰すと甘い味がする。虫はぺちゃんこ。

そこへ同僚の二人がやって来て、

「明日、釣りですか？ 一緒に連れて行ってください。邪魔はしませんから」

「餌は約三百匹用意出来そうだ。四人分あるから行こうか。朝早いぞ。寮のおばさんに握り飯を今夜作ってもらえよ。五時に出かけるよ」

「じゃ、すぐに支度をしなくちゃ。早く帰ろう」

二人は浮き浮きと喋りながら廊下を足早に遠ざかっていった。

結局四人となったからには、小さい川では喧嘩になりそうなので虹別行と決めた。

彼と俺で一人ずつ面倒を見ることにした。本流は彼らが、支流は俺たちが釣る。

「俺たちは本流では竿は五・四メートル。あの二人は三・六でどうかな。お前の相棒はせっかちだから、早いうちに十匹くらい釣らせてやらないと、魚がいないと臍へそを曲げて他の川へ行こうと言いつ出すか、それとも、お前の先に出て川を荒らし回ろうだ。ひがんで『餌が違つたためだ』なんて口を尖らすかも。念のためミミズも持つて行こう。トランクの中で飼っているのがある。

さて、俺の相棒は女医さんか。てこずりそうだ。釣りは諦めて面倒見るか。仕事のやり方から察すると、弱音は吐かないが助言は聞きそうもないな。仕掛けの取り

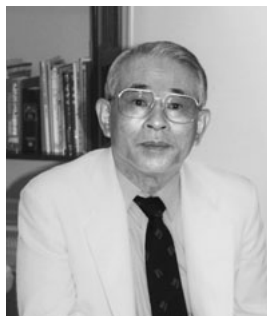
# 途中省略

本編はダウンロード時間短縮のため省略版でお届けしています。  
途中省略なしの完全版をご希望の方は製品版をご「購読」ください。

## 著者プロフィール

### 竹森 義男 (たけもり よしお)

1935年 栃木県足利市生まれ  
1962年 北海道大学医学部卒業  
1968年 釧路赤十字病院に勤務  
1974年 足利市で「ポプラ内科」開業



著者近影

こん せん

## 根釧原野の釣り

---

2005年6月15日 電子出版発行

著者 竹森 義男  
発行者 瓜谷 網延  
発行所 株式会社 文芸社

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1

電話 03-5369-3060 (編集)

03-5369-2299 (営業)

<http://www.boon-gate.com>

© Yoshio Takemori 2005 Corded in Japan

ISBN4-8355-9064-3

(文芸社発行の通常書籍(紙の本)については、全国書店でお尋ねいただくか、「文芸社ON-LINE」  
サイト <http://www.bungeisha.co.jp> を御参照ください。)

新 05.05.25 Y.H.